

生成 AI と学会について

・ ・ 視 点



ChatGPTを代表として対話型の生成AIの進歩が目覚ましい。議事録の自動生成や、PDF内の文章を自動で読み込み、要約してくれる機能などがあるが、個人的に最も活用していることが、専門的な物理現象や計算方法の調査である。これまでは関連しそうなインターネットのページを複数閲覧する、実際の書籍をあたるなどしていたが、必要な情報にたどり着くまでに時間を要することが多かった。例えば、ある書籍を読んで理解しきれなかったことに対し、インターネットで調べてホームページを閲覧しても近い情報はあっても本当に知りたかった情報にはたどりつけないことが多々あった。

この点、ChatGPTなどの対話型AIの場合、欲しい情報を素早く得ることが出来ると同時に、こちらから質問を投げかけることで理解を深めやすい。難解な物理式や現象に対して、「この数式におけるこの項は何を意味しているのか？」や「この現象に対してはこのような理解で合っているか？」など質問を繰り返すことで理解のスピードが格段に高まることを体感している。AIからの回答の正当性は自ら判断すべきであり、AIが出てきた当初は疑わしい回答も多かったが、その正当性も最近が高まっていると感じる。もちろん書籍にあたることが無駄とはいわない。書籍を調べるにあたり、意図せず違う視点の情報を得ることも多々あるし、直接正解を求めるのではなく、自らの思考で正解を導き出すプロセスは有益である。

また、これまで専門性のある知識や技能と考えられてきた分野の専門性が崩れつつあると感じる。プログラムのコードは、「こういうことができるコードを書いて欲しい」といえば作成されてしまう。初歩的なエクセルのマクロを動かすために何時間もかけた経験のある身としてはあの苦労はなんだったの

かと思ってしまう。

このようにこれまで専門的な知識としていた情報が一般的にすぐ検索され、理解が広まるようになった場合、学会というものはどのようなスタンスになっていくのであろうか（個人的にはまだ品質工学に関する質問に対してAIの回答精度はまだ高くないと感じているが）。なお、同様の問いかけが教育・普及委員会 普及WGより学会内の品質工学情報提供ツールの動画解説を通じて投げかけられている。

—最近はさらに新規アイデアの創出も生成AIから行うケースもあるという。既存の知識の理解だけでなく、クリエイティブ性もAIのものになっていくのか。

—最近の生成AIの進歩が著しいため、少し古い話になってしまいが、バーチャル美空ひばりやバーチャルモネを完成させる段階で、人間の評価が必要であった。生成AIは間違えることがあるので、最終的な判断は人間がする必要があることは今後も変わらないのかもしれない。

—AIは指示（プロンプト）に忠実に答えようとする。前提となる価値観を共有できないと、確かに指示とおりの答えではあるが、「そんなことは望んでいない」という結果になってしまうこともありそうだ。

—これまた古い映画の話だが、世界平和を望んで作られたAIが、人間が諸悪の根源と認識して、結果的に人間の自由を制限して平和を実現したという落ちになった。

—手法はAIに任せればよいが、生成AIを使いこなすためには価値観や哲学が今まで以上に必要とされるはずである。進化のプロセスを模擬したトライ&エラー（遺伝的アルゴリズム）によって今までには